

体験型教育観光についての提言

新田時也*¹

A Proposal Concerning Experiential Type Education Sightseeing

Tokiya NITTA

Abstract

Recently, the business of experiential type education sightseeing is actively done in various municipalities. In this paper, the author proposes the business as it ought to be, through a case of experiential type education sightseeing executed in Yui.

1. 問題

昨今、「体験型」を「売り」とする教育観光の事業が、各地の自治体で盛んに行われている。われわれの住まう静岡市でも、その傾向は顕著に見受けられる。というよりも、本市においては、全国に先んじて、体験型教育観光を実践しているという実績があり、その中心の団体は、著者が先の著述物¹⁾で紹介しているが、「静清教育旅行誘致協議会」である。当該団体は、旧清水地区、旧静岡地区の観光産業を活性化しようと、平成7(1995)年に発足した民間の集まりであり、既に、十年近い活動実績がある。本小論では、当該団体の学識経験者の立場にある著者が、当該団体と共に教育観光誘致を行った経験を通して、体験型教育観光のあり方についての提言を行う。

2. 体験型教育観光の事例

そもそも「体験」とは、「自分が身をもって経験すること。また、その経験²⁾のことであり、自らが積極的な経験を通して得た、貴重な知識である。すなわち、体験型教育とは、教育的に有益と考えられる知識を、体験を通して子供たちに身につけさせようとする手法であり、体験型教育観光は、子供たちに非日常の世界を体験させることを目的とした事業であると、著者は考えている。たとえば、都市に住む子供たちを農漁村に引率し、農作物の植え付けや

収穫、水産物の水揚げの様子などに触れさせることで、食の生まれる現場を理解させ、食の大切さを、身を持って理解させようとする事業である。

このような事業を利用した教育活動は、現在、「総合的な学習の時間(以下、総合学習)³⁾」として、小中高で実施されている。総合学習の目的は、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」、および、「各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする」ところにあり、そのためには、「自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること」を配慮するべきであると考えられている。その意味では、事業としての体験型教育観光は、総合学習における教育活動として有益な方法であり、多くの学校が利用している。

さて、駿河湾に面した由比漁港では、今年度から、体験型教育観光を受け入れている。この事業は、静清教育旅行誘致協議会の事務局長である宮城島史人氏と著者が、由比港漁業協同組合(宮原淳一組合長)に提案し、実現したものである⁴⁾。そのねらいは、観光事業を通して地域の活性化を考えるとところであるが、教育の立場からは、都会の子

2006年1月16日受理

*1 東海大学海洋学部航海工学科国際物流専攻 (Department of Nautical Engineering, Course of Logistics, The School of Marine Science and Technology, Tokai University)

供たちに魚のさばき方や定置網からの水揚げを見学させることで、海から食の埋められる現場を体験させるところにあり、いわゆる、食育の学習を目指している。本稿末尾に掲載されている資料1に見られる通り、「児童は今まで、海水浴、海釣りや潮干狩りなどレジャーとして（海を：著者注）体験しているが、実際に漁港を訪れて見学などをほとんどしていない。非常に今回の体験学習を楽しみ」にしており、このような体験を通して、「副読本・ビデオ・教科書等で学習していたものが実際に体験できる利点」、「漁港で働いている人達との交流ができるために、生きた学習」、そして、「情操的な効果」として、「地域や仕事の違いを理解しながらひとりの人間として成長できるきっかけ」をつくってほしいという教諭の方からの熱い御意見・御感想がある。同じく、本稿末尾に掲載されている資料2では、この事業についての詳細が紹介されており、著者は、その中で、「体験学習は児童の情操面や食育、また、（体験）発表能力の伸長に効果がある。社会の成り立ちの一つとして、児童が漁業の実情を体験することは貴重だ。こうした体験を含めた教育・観光などは、地域の活性化にもつながる」と、指摘した。

3. 提 言

前節で紹介した事例と、それに関連する資料を通して、著者は以下の諸点を提言したい。

(1) 体験型教育観光の事業化について 体験型教育観光需要の調査；

提供を考えているプログラムが、果たして、学校側の需要を満たすものであるのか、学校側は、どのようなプログラムを望んでいるのか、ということについてのサーベイが事前に行われないと、折角のプログラムも活用されなくなってしまふ。そのためにも、web調査やモニター調査を通して、需要側の嗜好を正しく掴むことが、第一に、必要であろう。

体験する学校側との密なる打ち合わせ；

学校側の需要を掴むということは、学校側の教育の意図に沿ったプログラムを用意するということであり、すなわち、体験型教育プログラムを用意する場合には、小中学校のカリキュラム構成を、こちら側が明確に把握しておく必要がある。

(2) 体験型教育の方法について 双方向的体験型教育プログラムの確立；

次に、体験をさせる方法としては、プログラムの内容を、実際に子供たちが手に触れる体験が最も教育効果を高

めると思われる。たとえば、石垣イチゴ観光では、定植のプログラム化を計画している⁵⁾。石垣イチゴを通して、都会に生活する人々に、久能の歴史と駿河湾の自然に触れていただき、都会の生活では忘れかけている「生きる」という営みを思い起こしてほしいという希望で、このような計画を企てている。実際に、自分の手でイチゴの苗を石垣に植え込みを行いながら、農園主の方々とのコミュニケーションをとる中で、なぜ、久能に石垣イチゴが名産となったのか、その歴史などを学習してもらえばと考える。そのためにも、農園主の方々との、双方向的な体験が、非常に効果的であり、体験型教育観光は、更に、双方向的になっていくべきであると考えている。

専門家集団との連携；

教育効果を高めるためにも、体験型教育観光を推進し、そのプログラムを計画するには、教育学を専攻とする専門家との連携が必要であろう。本市内においても、複数の大学機関に教育学の研究者が籍を置いているので、われわれ観光を研究の対象とする者と教育学の研究者の方々に、そのアドバイザーとしての役割をお願いしてはいかがであろうか。また、学校法人東海大学グループ内には、福岡短期大学に「観光文化研究所」がおかれているので、当該研究所との連携も考えるべきであると思う。

ここに掲げた項目以外にも、たとえば、「ホスピタリティの充実」や「海外からの誘致計画」などが、上げられよう。特に、海外の子供たちを教育誘致する場合には、国際情勢の要因が大きく関わることになりやすいので、より慎重な取り組みが求められるだろう。

このような地域振興は、官や学の主導ではなく、民の自発的な活動を通して実現されることが最も健全であると、著者は考えている。すなわち、著者は、地域振興における官学の役割として、あくまでも民の活動のサポート（裏方）に徹すべきであると考えている。

注

- 1) 拙稿「教育旅行誘致の意義とその方策に関する一考察—静岡教育旅行誘致協議会の事例研究を通して—」（東海大学海洋学部、東海大学紀要海洋学部、『海—自然と文化』、第2巻第2号、63-75頁、2004年11月）を参照されたい。
- 2) 新村 出編『広辞苑 第四版』、1995年、p.1539、から引用。
- 3) 以下、「」内は、「小学校学習指導要領（平成10（1998）年12月告示、平成15（2003）年12月一部改正）」から引用。
- 4) 「由比漁港 職業体験の観光地に 魚仕分け 漁船乗船」（静岡新聞、夕刊、2005年1月21日付）を参照されたい。
- 5) この計画は、久能母狩連絡協議会の前会長である川島正己氏と著者の間で作成されたものである。

横浜市立あざみ野第一小学校
第5学年 主任 佐々木 茂

1 体験学習の目的

- ・静岡県清水三保周辺の自然に親しみ、自然の持つ美しさを体験して理解する。
- ・由比漁港の見学、定置網の見学を行い漁業について関心を持ち、理解する。
- ・集団での決まりを守り、自主的な集団生活を体験学習する。

2 体験実施の背景について

- ・本校は、横浜市青葉区あざみ野にあり、横浜の北部に位置している。北は川崎市北部、西は東京都町田市に隣接している。南に位置する横浜港までは地下鉄で三十分かかり、学校から東に商店街を徒歩十分で田園都市線あざみ野駅に至る。渋谷から四十分の東京のベッドタウンである。学区内はマンションが多く建ち並ぶ住宅地で帰国子女が多い。

児童は今まで、海水浴、海釣りや潮干狩りなどレジャーとして体験しているが、実際に漁港を訪れて見学などをほとんどしていない。非常に今回の体験学習を楽しみにしている。

3 体験学習に予想される成果について

・学習面の効果

五年生の社会科で学習する産業について(漁業)、実際に自分の目でみたり、体で漁業を体験することで理解する効果が上がる。

(海や港から離れた本校の児童は、副読本・ビデオ・教科書等で学習していたものが実際に体験できる利点がある。)

漁港で働いている人達との交流ができるために、生きた学習ができる。

・情操的な効果について

国語科の学習で身に付けたインタビューをしながら、人と人のつながりを持つことができ、自分たちの生活をしている場所(横浜市)と由比の人たちの違いを比較体験して人々の思いや生活を理解することができる。そのため、うわべだけの見学体験ではなく、児童が体を動かし人々と触れ合える体験を計画している。

今回の体験学習で、地域や仕事の違いを理解しながら一人の人間として成長できるきっかけになってほしい。(自分が食べている魚は多くの人に関わって、食卓にあがることや苦勞して魚を捕っていることを理解して、今までの生活を顧みてこれからの生活に役立ててほしい。魚の好き嫌いを無くせる一つのきっかけにもなってほしい。)

以上

Material 1 A typical answer from the school that did experiential type education sightseeing in Yui fishing port

賑わう漁港目指すJF由比港漁協

JF由比港漁業協同組合（宮原淳一組合長）が関係者の協力を得て、今年度から漁業の体験学習を行う児童の受け入れを始めた。このあと完成予



定の新由比漁港の利用を含めて、サクラエビなどの水揚げとともに、将来的には一般の人も取り込んだ観光漁業の町として、賑わう漁港を目指したい。宮原組合長と、意欲をみせている。由比港漁協の根据地・由比漁港は、駿河湾特産

体験学習児童を受け入れ

・サクラエビの水揚げだけでなく、観光漁業の全国的に知られる。同港導入による漁港の活性化の16年水揚げは約194を画ってこれたこととして、3万、約34億1600万。今年6月と7月に横浜

一般の人 観光漁業推進へ 取り込み

磯棚によるアジ、サバ、横浜市内の小学校1校かタチウオほかで、全水揚げ98人（5年生）を受け金額の約92%をサクラエビが占める。由比漁協や体験旅行などを誘致し、協は静岡県下の沿海漁協でいる静岡教育旅行誘致

由比漁港での漁業体験と、充実した受け入れ態内容に定置網、漁船の水勢を強調する。児童を引掛けやセリの見学、魚を率して、今月中旬に由比（さば）いたり、魚介漁港を訪れた横浜市港南17、18年度に同上層

静岡の体験型教育観光研究を行い、学識経験者として由比町の観光振興などにかかわっている新田時也東海大学海洋学部講師は「体験学習は児童の情操面や食育、また、（体験）発表能力の伸長に効果がある。社会の成

理者・由比町）は昭和63年度から、現在の港から（体験）発表能力の伸長に効果がある。社会の成り立ちの一つとして、児童が漁業の実情を体験することには貴重だ。こうした体験を含めた教育・観光などは、地域の活性化にもつながると、新たな取り組みを推進している。（新漁港の）埋め立てをにらみながら、20、21年度に卸売な取り組むにエールを送る。（朝比奈）

Material 2 A newspaper article that tells of the experiential of education sightseeing for elementary school to visit Yui fishing port

要 旨

昨今、体験型教育観光の事業が、各地の自治体で盛んに行われている。本小論では、由比で実施されている事業を事例として、そのあり方についての提言を行う。